

防災問題研究会

第9回災害対策本部のシミュレーション演習

～ 大地震に備えた本格的・実践的な図上演習 ～

第9回目の災害対策本部シミュレーション演習を12月3日に実施した。この演習は平成16年から毎年1度実施している。参加者は34名と、昨年の54名から減少したが、4つの対策本部に分かれて真剣に演習した。

日本企業の防災訓練

日本企業で一般的に行なわれている防災訓練は、災害対策本部が作成したシナリオに従って、一般従業員が初期消火、避難、応急手当などを計画通りに行なうことに主眼が置かれており、対策本部要員はそれを観察する側にある。一方、欧米では、これらの定型化した訓練はドリル（単純動作の反復練習）と呼ばれ、規模の大きな災害発生時には役に立たないことから、もっぱらこの本部要員のシミュレーション演習（図上演習）が主体となっている。

シミュレーション演習の進め方

この演習は、正式には疑似災害演習（モック・ディザスター）と呼ばれるもので、参加者はそれぞれ災害対策本部を構成する本部長、避難誘導班長、消火班長などの保安要員となり、決められた条件と時間軸（今回は地震発生時から60分間経過するまで）の間に起こる被害や事象に対し、各役割に従った判断や指示などを行う訓練をする。事前にシナリオは知らされておらず、60分経過するまで、リアルタイムに職場や外部より多数の被害報告や問い合わせ（今回は60分間に48の事象が発生）が災害対策本部に入ってくることになるのでぶっつけ本番の実力が試されることとなる。

過去の反省と改善点

過去の演習の反省から、今回は演習開始前に参加者各自の責任を再徹底し、情報集計シートを配布するなどの工夫をした。しかし、今回も、①事前に知らされていない事象が次々と発生するので驚いてパニックになる。②そのため、役割分担を忘れてしまう。③情報を簡潔に整理してまとめることが出来ない。④情報に優先順位が付けられない。⑤結果として、与えられた時間軸内（今回は発災から60分間）に果たすべき災害対策本部の役割が果たせないという事態となった。



参加者の大半が初めての参加ということで、戸惑うことが多かったが、何度も経験することで本番では平常心で動けるように備えて戴きたい。

東日本大震災で伊達市のラップトップパソコン工場が被災した富士通は、すぐに島根のディスクトップパソコン工場へ生産を移し、12日後には生産を再開したが、事前に40回以上のシミュレーション演習を行い、こうした事態への対応手順が既に決められていたということである。シミュレーション演習は、BCP構築にも役立つツールであり、一社でも多くの企業に採用戴きたい。

演習シナリオ(48項目より抜粋)

経過時間	事象
0分	M7.3直下型地震発生、震度7
1分	打ち合せに来たお客さんが背中を打ってうづくまっている。どうすればよいか。
2分	食堂で厨房設備の下敷きになった従業員がいる。救出できないので応援を頼む。
7分	食堂より出火。現在初期消火中。
11分	工具室で胸を打った従業員がおり、意識はあるが受け答えが曖昧な状態。どうする。
35分	震度6の余震発生
37分	エンジン組立ラインの天井が落ち、消防副班長が倒れている。意識がない。
54分	視察中の海外自動車メーカーのジョンさんが負傷。本国へ連絡を取りたいと言っている。
60分	外出中の工場長より、被害状況を速やかに報告するように指示があった。